

口蹄疫に思う

野生動物学研究室教授 高槻成紀

たいへんなことが起きてしまった。いくつか思うことがあった。

最も印象的だったのは、都城のいかにも善良そうなおじいさんが、本当に悲しそうな表情で「家族とおんなじじゃ。名前を呼べば答えるしな。」といいながら、処分することを嘆いておられたことだ。胸が痛んだ。

我々の属す動物応用科学科は畜産学の伝統があり、「家畜が好きだ」とか、「牧場ってのどかで働いてみたい」と考えて学科を選んだ学生もいる。私は担任をすることになったが、夢のようなことを期待し、現実を知って退学した学生がいた。そういう甘さに対しては、今回の事態は、畜産業というのが、そして生命を預かる職業というものが、疫病の危険と隣り合わせで、一瞬にして地獄に変わるリスクを擁する職業であることを認識するよい機会であったかもしれない。

10万頭を超える家畜を「処分」する。私はそのことの重みを実感できないでいる。私はシカの駆除にかかわっているが、数百等を駆除しただけで、死体の処理は大きい問題になる。10万頭のウシ、ブタというのがどれだけのことなのか想像ができない。そして、そんなにもたくさんの家畜が飼育されていて、それを私たちが当たり前のように食べているのだということも考えさせられた。本学科では家畜の飼育環境を改善することをテーマにしている研究室もある。早晚屠殺する家畜のアメニティとは何か。つまりそれは家畜のためといいながら、結局、人にとっておいしい肉

をとるためではないか、などと考えもする。そうした研究の意味と、こうした病気の感染とはどうつながるのかということも考える。実にむずかしい問題だと思う。

想像を延長させれば、医学の歴史ということもある。今、日本人の死因は癌が最多であろう。平均寿命が80歳を超えたということは、昔であれば、病名がわかってわからなくても、「老衰」とまとめていたことであろう。それだけ長く生きれば故障が出るのが当然なのだから。私が子供のころは病気の内容ももっと多様で、確か脳卒中が最多で、癌や心臓麻痺も多かった。戦前であれば肺結核や胃腸炎などが多かったはずだ。中世のヨーロッパではペストが猛威をふるったし、世界中で人がわからない理由で病にかかって死んでいった。乳幼児は死んでもしかたなく、神の加護を受けた子だけが生き延びると思われていた。金持ちも権力者も例外ではなかった。人々は、明日は我が身とびくびくして暮らし、不幸が我が身にふりかからないよう、神仏に祈り、縁起をかついだ。人類の歴史のほとんどは病気への恐怖にさらされていたとってよいだろう。それだけに、ジェンナーやコッホは人類を救った賢人として尊敬を受けたし、我が国でも北里柴三郎や野口英世は偉人とされる。

今回の口蹄疫の場合、「拡大がとまって欲しい」と感じた心理は祈祷と同質であったように感じ、細菌やウィルスの存在や原理がわからなかった時代の人々の病気に対する気持ちがいかにあつたろうかということ可想

像した。

その意味では報道のありかたは、行政の対応を批判することに終始し、それはそれで重要なことではあるが、口蹄疫についての疫学的な解説などがあまりにも少ないと感じた。報道が社会的責務をもつ以上、報道の側にいる人が批判の対象とする行政の対応の遅さを、私は同じ意味で報道側自身に向けたい。マスコミが本当に情報を重んじるのであれば、海外での事例などを分析し、あるいは専門家に質問をし、もっと早く報道していれば、行政の対応も違ったものになっていたはずである。私は日本のマスコミは、あたかも「客観的に起きたことを伝える」ふりをしながら、実際

には多いに世論をコントロールしており、そうであるのに客観性をよそおう欺瞞性があるてよくないと思う。一番よいのは、口蹄疫の事態は解決していないのに、ワールドカップが始まって日本が初戦に勝ったら、手のひらを変えるように、口蹄疫のことをまったく取り上げなくなったことである。実態がそうであるのなら、「私たちは内容の重大さにかかわらず、視聴率が上がるものならなんでも放映します」というほうが、まだ正直だと思う。

口蹄疫の拡大と社会の反応、マスコミの姿勢、市民の反応など、現代社会の一面を考える機会になった。